

ることになる。

又、八健度論では、旧訳毘婆沙論と同じく世第一法について、

「云何世間第一法。答曰。諸心、心法次第越次取證。此謂世間第一法。……」

として、心、心法が複数で表現されていることは、異部宗輪論の説一切有部説や発智本論の

⑮「世第一法當言一心多心二耶。答曰言一心。」

の世第一法唯一心の根本問題にふれることになる。又補特伽羅非前後二心俱生説にも落ちることとなる。この様な他の例は、拙稿の参照を請う。

○

以上、世第一法説に出てくる問題を、諸部派との関係の中で考察したが、ここで提出した分別論者と応理論者との関係を新たな問題提示と受けとめて、有部阿毘達磨の歴史的側面と教法的側面の理解を深めるために、一指針ともなればと考えて事例に従った自己の見解の一端を披瀝した。又、さらには今後予想されうる浄土教の往生思想と正性離生の関連も考慮に入れるならば、尚別な場面での世第一法説の展開が期待できることにもなるだろう。

註① 大正27巻7b

② 大正27巻8b

③ 大正27巻8b

④ 大正27巻8b

⑤ 大正27巻8a

⑥ 大正27巻8a

⑦ 大正27巻14c

⑧ 大正28巻907b

⑨ 大正27巻313a

⑩ 大正27巻169a

⑪ 大正31巻787c

⑫ 大正27巻10b

⑬ 大正27巻551c

⑭ 大正27巻919a

⑮ 大正8巻71c

⑯ 大正27巻20c

⑰ 印度学仏教学研究三十巻第二号

「新旧両毘婆沙論に於ける一・二の相違点について」。

## 観徹と浄土曼荼羅

松永知海

観徹（一六五七—一七三二）は、円蓮社義管浄真阿と号し、鎌倉光明寺第五十八世となった江戸期浄土宗を代表する学僧の一人である。彼の名著『浄土三部経合讚』が簡潔明快に書かれ、後学の指針としてながく重要視されてきたことによっても、それは理解できるのである。

本稿では、そうした観徹と浄土曼荼羅とのかわりについて述べてみたい。

かれの伝記は、没後八年して著わされた『現証往生伝』（以下、伝記と略す）に詳しい。彼は明暦三年に京都で生まれた。十五歳の時関東に遊学して、諸宗の蹟に達し、雲臥に招かれて小金東漸寺の学頭となる。正徳二年（五五歳）に江戸崎大念寺、享保五年（六三歳）に水戸常福寺、同十一年（六九歳）鎌倉光明寺へと檀林を歴住し、同十六年（七四歳）に没する。伝記にはこの間、日課念仏をよく修し、盛年の頃より日課念仏一万遍、怠ることがない、と記されている。

ところで、彼と浄土曼荼羅を結びつけるのは、伝記に、

同十六年ノ夏夏化リ智光清海ノ二変相ノ合讚ヲ講ゼリ

とある記述だけである。この二変相の合讚はすでに正徳二年に『智光清海曼荼羅合讚』二巻として上梓されているから、それをもとに講じたことがわかる。しかしなぜ亡なる年に二変相合讚を講じたのであろうか。その手がかりとして、伝記につきぎの文がある。

衆ニ対シテ云ク。我レ今年ハ西帰ノ年ナリ。斯終身ノ結講ナリ、トテ毎日臨終正念、同生極楽ト回願セシメラル。初春以來念頃ナル人ニハ斯云テ永訣ヲ取レリ。預メ命期ヲ知ルニヤト後ニ思ヒ合スルコト多シ。

これにより、観徹はその死期が近づいたことを知って、終身の結講としてこの二変相を講じたことが記されている。

○

『国書総目録』著者別索引によれば、観徹の著書は九部十九巻あったことがわかる。そこに浄土三部経関係・五重関係・戒関係の著書とならんで、『智光清海二曼荼羅合讚』二巻がある。それら二曼荼羅に当麻曼荼羅を加えて浄土三曼荼羅というが、なぜ観徹は智光と清海との曼荼羅に限って解説を加えたのであろうか。

これについて『智光清海二曼荼羅合讚』の自跋につきぎのようにある。

其一、智光夢見小曼荼也。其二、法如願觀大曼荼也。其三、清海感致中曼荼也。蓋示此三家即示一切衆生也。是則濁亂凡愚坐拜淨境結緣報土可謂希世之至宝矣。然第二變相古米盛流芳而於初後二變則瞻觀者幾希又未聞有解釈可不惜耶。故今段別本圖全相每段對合經釈讀説題名合讚以提子有緣一

このように、観徹は浄土三曼荼羅すべてを、濁亂の凡愚が坐しながら浄境を拝し、縁を報土に結ぶといひ、初後の二変に解釈のないことを惜んでこの二曼荼羅合讚を撰したことがわかる。観徹が三曼荼羅を常に拝していたことは、彼と交流のあつた義山もつぎのように記している。

吾光明大師畫浄土變相者三百壁焉。散施四方二勸誘有緣。浴其末流者敢不效之乎。本邦乃有智光・清海・三變。皆誠心所感得而其因相有広狭出没者蓋亦聖者隨機巧設之所致耳(略)予之社友、三縁真阿和一(略)恒壁於彼三變次第歴観用為稱仏之助業率以句而更焉。

観徹はつね日頃から三曼荼羅を句をもって次第に歴観し、稱仏の助業としていたことがわかる。このことは後で述べる彼の名著『浄土三部経合讚』のうち『観無量寿経合讚』・『阿弥陀経合讚』のなかに浄土三曼荼羅を引いて、經典理解の一助としていることからしてもよくわかることである。

ところで、観徹はいづごろより三変を受持するようになったのであろうか。伝記によれば、当麻曼荼羅の記述は先に記した享保十六年の夏のところに「智光清海ノ二変相ノ合讚ヲ講ゼリ。云云」という記述のみである。観徹が『智光清海二曼荼羅合讚』を刊行したのは正徳二年(四五歳)であるから、江戸崎の大念寺に住する前からこのような浄土曼荼羅に対する鑽仰があつたのであろう。それは直然の序によつても裏づけられる。

属者命工画工新写三变自備瞻礼。又懐初後二变不散布之歎茲歲論講之暇鑑別円壇摹写方册以合經釈備加演解優為三卷題目合讚一

この正徳二年夏につくられた序によれば、最近画師に命じて浄土三曼荼羅を写させたこと、さらに智光・清海の二変が行なわれないのを歎いて合讚二巻を著したことが記されている。すると大念寺に住する前、小金の東漸寺に住していた頃に二曼荼羅合讚を執筆する準備がなされていたことになる。

○  
ところでここに直然の記すとおり、観徹が絵師に命じて作らせ、つねに持っていた当麻曼荼羅一幅がある。それは現在、美作誕生寺の宝物館に展観されているもので、絹本極彩色、方二米余の四分一図である。そのうら書きによつてこの曼荼羅の由来が

わかる。

当山、御影前永世宝物、観徹大和尚之遺弟中自秋卯和尚寄附之曼陀羅也

作易誕生寺

享保十七子年六月

門眷(花押)

曼荼羅十万人会  
南無阿弥陀仏  
檀中同生安樂

この誕生寺第十七世門眷津海のうら書きにより、この曼荼羅が観徹遺弟の秋卯から誕生寺に寄附されたこと、それは観徹が亡なつた翌年であつたことがわかる。このうら書きは、観徹自らが書いた、この当麻曼荼羅の願文ともいふべきつぎの一文に添えてある。

観無量寿経曼荼羅四分一図

余、前任常州江戸崎大念寺之日、命京師画工青木七太夫者摹写彩飾此聖図、維時享保三年也。爾來常展之壁上、礼誦稱仏而普令都鄙道俗、瞻仰注念發起願生念仏之心、今茲余、染老病、方垂碩西、因而略述意趣、以告之後進云云。  
享保十六歲次辛亥八月日

相州天照山光明寺第五十八世

円蓮社義管観徹謹誌

真阿(朱印) 観徹(朱印) 之印

このうら書きによつて彼の伝記や義山・直然のいうことが一層明確に理解でき、さらに彼の曼荼羅に対する考え方がわかつてくるのである。第一に、観徹はこの曼荼羅を享保三年、江戸崎大念寺に住していた頃、摸写させたことがわかる。第二に、その摸写をした京都の画師青木七太夫は、『智光清海二曼荼羅合讚』の画図を担当したことがその刊行者秋田屋清兵衛の名とならんで記されているのである。青木七太夫の仕事はやはり貞享本『当麻曼荼羅』に代表されるといふのであろう。貞享本は大雲院性愚によつて発願され、貞享三(一六八六)年に靈元天皇宸筆の銘文が入ることによつて完成したものである。それは大雲・義山等によつて「貞享正図」と名づけられ、以来現在に伝えられているものであり、その所以は原本を基本に、文亀本を踏まえて転写されたことによる。このことからわかるように、青木七太夫は当時名高い画師であつたことがわかり、彼が貞享本を完成した後、観徹は二曼荼羅合讚(正徳二年刊)の画図作製を依頼し、さらにこの四分一当麻曼荼羅の摸写を依頼するのである。故にこの誕生寺本は貞享本の第一の模本といふことができる。また直然の序に、三変を新写させた、と記されているから、他に智光・清海の二曼荼羅も青木七太夫が転写

したことはまちがいのないところであろう。第三に、さらに義山が序にいうように、常にこれを壁上に展じ、礼誦称仏していたことが、この観徹のうら書きによって裏づけられることである。その願文にいう「今茲に余、老病を染じ、方に碩西に垂んとす。因って意趣を略述す」とは「普く都鄙の道俗をして瞻仰注念し、願生念仏の心を発起せしむ」というところにあることはいうまでもない。この願文が、享保十六年八月に揮毫されたことは、寂する四ヶ月前のことであり、伝記にいう、

(享保)十六年ノ夏<sup>遷化</sup>智光清海ノ二変相ノ合讚ヲ講ゼリ。衆ニシテ云ク、我レ今年ハ西帰ノ年ナリ、斯終身ノ結講ナリ、トテ毎日臨終正念同生極楽ト回顧セシメラル

と記される。合讚を講じた数ヶ月の後に記した願文であり、観徹の遺訓ともいうべき言葉といえる。

そうした観徹の浄土曼荼羅に対する態度は、その著書『浄土三部経合讚』にもあらわれている。いうまでもなく『浄土三部経合讚』は長く『三部経』講読の手引書として広く読まれている書物である。そのうち当麻曼荼羅を引く箇所があることはすでに指摘したことがある。その他、智光・清海の二曼荼羅を引いて経証ならぬ絵証をして経文の説明をしている。それらの箇所は『観無量寿経』では、

。宝樹観の「宝草」の説明に智光・清海を、「網」の説明に智光を、「宝樹」の説明に当麻を、「諸天童子」の説明に当麻を引く。

。勢至観では「勢至菩薩の説明」に清海曼荼羅銘文を引く。

。雑想観では「三尊(身同)」の説明に当麻を引く。

。下品上生段では「往生人引接」の説明に当麻を引く。

『阿弥陀経』では「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」の部分で、当麻と清海の曼荼羅を引いている。

右の例証から観徹はつねに経文を解釈する場合、浄土三曼荼羅をもって具体的に理解を進めていったと推定ができる。特に『浄土三部経合讚』が講義録であるという性格を考えると、曼荼羅をもって説明することは聞く者たちにとっても理解しやすい方法であったといえよう。

結論的にいえばこれらの例証は観徹が曼荼羅を単に経文に付随する図相とみるのではなく、阿弥陀仏像・三尊像と同じく信仰の対象としてだけでなく西方浄土を説く経文と同じ、聖図として拝瞻していた結果であると考えられる。

以上、観徹と浄土曼荼羅との関係を述べた。伝記とそれを補う義山・直然の言葉、さらにそれらを裏づける観徹所持の当麻曼荼羅のうら書きと『浄土三部経合讚』に引

用する浄土曼荼羅を指摘した。それらのことから観徹の学問成果は『浄土三部経合讚』に代表されるけれども、その意図するところは称名念仏の精励で貫ぬかれ、その補助として極楽を具象化している浄土三曼荼羅を用いたことが理解されるのである。

註① 『浄土宗大辞典』第一巻二五〇頁「観徹」の項。

② 卷上、三丁ウ。桂鳳撰、元文五刊。

③ 元禄元年(一六八八)〜同一二年(一六九九)に東漸寺に住す。雲臥が寂にあたり口占した西帰偈は観徹が筆記したという。(『続日本高僧伝』)『大日本仏教全書』一〇四卷一七四頁下)。

④ 註①に同じ。

⑤ 二四〇頁四。

⑥ 拙稿「当麻曼荼羅研究書について」(『浄土宗教学院研究所研究所報』第三号昭和五六年十一月)の表を参照。

⑦ 『智光清海二曼荼羅合讚』義山序。

⑧ 『智光清海二曼荼羅合讚』序。

⑨ 『当麻寺』(『大和古寺大観』第二巻)。

⑩ 江戸崎大念寺には浄土三曼荼羅三幅があり。「此三幅は毎月二十三日懺法相勤時為可奉掛之義管上人造之」(『浄全』二〇巻二九五頁下)、現物不明。

## 補陀洛の一考察

妹尾 匡海

補陀洛(Goutaka)はいうまでもなく観音の浄土であるが、これについて説示する經典の数は必ずしも多いとは言えず、またその思想性についても、阿弥陀仏や阿闍仏の浄土思想ほどに顕著なものを認めることができないといっている。この事實は、本来の観音信仰にとって補陀洛浄土思想が必ずしも重要な意味を持つものでなかったことを示唆していると思われるのであるが、それについてはひとまず置き、まず諸經典に説かれる補陀洛についてその内容を見ておく必要があると思われる。

第一に、補陀洛について説く諸經典のうち、成立のもっとも早いものとして『華嚴経』の名を挙げることができると思われる。この『華嚴経』には、六十卷本(旧華嚴)と八十卷本(新華嚴)とが存在するが、補陀洛についての記述は両経とも内容的に大差のないものとなっている。